

# 家族とつくる多様な解決

龍谷大学文学部臨床心理学科准教授 赤津 玲子

2007年度から、毎年11月の第3日曜日が「家族の日」となったことをご存知でしょうか。その前後は「家族の週間」と名づけられました。内閣府によると、子どもを家族がはぐくみ、家族を地域社会が支えることの大切さについて理解を深めてもらうためのことです。家族の日を作らないと、子どもをもつ家族や地域社会の大切さを実感できないということは、家族が昔よりも生活しにくくなったということかもしれません。ここに至った背景について考えさせられる、厚生労働省(2018年)の数字があります。1986年と比較すると、児童のいる世帯は46.2%から24.3%に減少、三世帯同居家族は、15.3%から5.8%に減少している一方で、ひとり親と未婚の子家庭は、5.1%から7.2%に増加しています。この数字を見ただけでも、30年の家族の変化には驚くばかりです。

さて、わたしたちは誰でも「家族」に対するイメージや思い、理想像、こうあるべき論などを持っています。それらは、良い意味でも悪い意味でも、自分の育った家族との違いによるものがほとんどです。例えば、困ったら相談にのってくれる母親、経済的な支援を惜しまない父親など、明るいイメ

ージを持っている方がいます。反対に、母親が厳しくて怖かった、父親は忙しくて遊んでくれなかったなど、気持ちの良い思い出になっていない方もおられるでしょう。この個人的な家族イメージが、家族と関わる先生方の能力以前の問題として、解決の可能性を狭くしているのではないかと思うことがあります。家族の正しいモデルはありません。目の前にいる家族のあり方を認めて理解すること、それが解決へ入り口になります。

教育現場は、子どもだけに留まらず、コミュニティの一施設として多様化した家族を見守るという役割も担わなければならない事態になっています。例えば、虐待対応などは、法整備と共に、学校も含むコミュニティの問題として検討していかなければならないでしょう。このような状況ゆえに、多様化する家族への対応が日々難しくなっているため、教員が疲弊することなく家族とお付き合いする術を身につける必要があると思います。今回はごくシンプルな事例を提示し、その経過から、お付き合いのポイントの一部を示したいと思います。

## 事例

欠席が続いているA子は中学校1

年生、小学校時から成績は中程度、親の手を煩わせない大人しい子どもでした。弟は小学校5年生、妹は小学校2年生の3人きょうだいです。父親は会社員、母親はパートタイムで働いています。A子のクラスは比較的派手な生徒が多く、入学直後にクラスメート同士の喧嘩があり、一人が骨折する事態となりました。担任の根気強い働きかけでクラスは徐々に落ち着きましたが、A子はGW明けから腹痛を訴え学校を休むようになりました。最近は、オンラインゲームで知り合った人と話しながら夜中にゲームをする毎日のため、昼夜逆転しているようで、担任が家庭訪問するとジャージでいることが多くなりました。A子によると、家族はきょうだいも含めてみなゲーム好きで、両親も帰宅してから寝るまで、夕食以外の時間はゲームをして楽しんでおり、ゲームの話をするのは家族の日常のようでした。母親は登校させようと毎日説教したり怒ったりしているようでした。父親は何も言わないようですが、A子によると、父親もその昔不登校だったことがあるからとのことでした。

## 1. 欠けたもの、探すことよりジョイニング

担任は、A子が母親ともっと話をしたいのかなと考えました。A子の母親はどうしても仕事と家事以外の少ない時間に下の子に関わる人が多いからです。そのため、母親が焦って学

校に行くよう説得し続けるよりも、もう少し話をしてくれたらいいのにと思いました。父親はA子と仲が良いのですが、友だちのようにゲームの話ばかりしているので、少しは父親らしくA子の好き放題にはさせないで欲しいと思いました。家族は、A子がオンラインでも外部の誰かと話していることを肯定的にとらえていましたが、担任らは「相手が誰かわからないのに」と否定的でした。学年全体でA子にどう対応したらいいのか話し合いましたが、家族への批判的な雰囲気は漂い、「家庭の力がない」とため息に終始しました。

子どもの家族とお付き合いするためには、まず家族に仲間入りさせてもらうことが必要です。家族療法では「ジョイニング」と言われ、家族の雰囲気やルール、価値観に合わせたり、家族の使う言葉を使ったりなどする、「家族に合わせる術」のことです。誰でも土足でドカドカ家に入られるのは嫌ですから、ジョイニングでは「自分が家族からどう見えるのかを常に気にする術」を心得ることも肝心です。自分は土足のつもりがなくても、相手から見て土足でドカドカに見えたら、それはジョイニングにはなりません。

家族に欠けているかのように見える社会常識や、養育する力がないことを批判する時間やエネルギーがあったら、それらをジョイニングに回す方が有効です。仲間に入れてもらえなけ

れば何も始まりません。全ては関係次第、何をするにも良好な関係ありきなのです。

## 2. 責める気は、ないよと労うだけでいい

A子の欠席が続くようになってきた頃、担任に電話がきて母親が来校しました。ゲームで昼夜逆転している話担任が困った顔をすると、母親は「うちも私もお父さんもゲーマーなんです」と後ろめたそうに言いました。

保護者来談の経緯は、担任の呼び掛けによるのか保護者の自発的来談かの違いがとても大切です。呼び掛け来談の場合は、保護者の「責められるのではないか」という不安が高いかもしれないし、構えているかもしれません。自発的来談の場合は自責的な話がでるかもしれません。保護者が明るそうに話していても不機嫌そうにしている、常にどこかに不安な気持ちを抱えていると考えた方が賢明です。例えば、「子どもさんは、昼間は何をしているんですか？」と何気に聞いたことで、仕事をしている母親は非難されているような気持ちになるかもしれません。教員が「保護者の責任を問うつもりはない」、「家族に原因があるわけではない」というスタンスを全面的に出し、「よく来てくださいました」、「大変ですね」という労いの気持ちを示すことが、関係づくりの初めの一步になります。

## 3. ある程度、急がば回れと言いつけ

夏休みの前に、A子のご両親が学校に来談されました。母親は、早く子どもを学校に戻さないと学力が心配だと訴え、それをA子に何度も話していたのですが疎んじられていました。父親は焦らなくていいと言い、A子とゲームの話ばかりしていました。担任は母親に聞いてみました。「お母さんの思いをA子さんはうるさいという言葉で片付けてしまっているようで、やりきれないですね。A子さんに、お母さんの気持ちがちゃんと伝わるようにするには、お母さんがどんなふうに声掛けしたらいいのかなあと思いました」。母親は考え込みました。父親には「お父さんの焦らなくていいというお気持ちの背景にはご自身のつらい経験があったんですね。A子さんが、どんな風に焦らず過ごしたらいいと思われませんか」。父親も考え込みました。

両親面接は担任にとって大きなチャンスですが、子どもへの対応で異なる意見を話されると、とてもプレッシャーを感じます。でも、違って見えるように見えても、背景にある思いを丁寧に聞くと納得できることが多々あります。何よりも、担任が一方の思いを聞くことで、もう一方がそれを聞くことになり、変化が起こることがあります。両親の間を調整しようと焦って関係づくりに失敗するよりも、片方に聞かせるつもりで片方の話をじっくり

聞くという形を利用することが大切です。急がば回れ、なのです。

急がば回れは、いろいろなところで使えます。毎回話の終わらない保護者との面談は、前もって「大事なお話なので1時間予定してます、時間が足りなければ他日にまた時間をとりたいと思ってます」など説明し、話を聞く枠を作り出すことは、時間内に仕事をこなすために必要なことです。何らかの対応を決めなければならない時には、「とても大事なことだと思うので、管理職ときちんと相談してから連絡します」など言うことができます。また、例えば、右往左往するような事態になった時に、教員ら一人一人が問い合わせってくる家族に一生懸命対応することでズレが生じ、家族の怒りを煽ってしまうことがあります。その場合も急がば回れ、「大事なことなので、教職員で話し合っただけで対応を決めることになっていきます」など説明できます。焦っている時ほど動かずに、急がば回れ、が大切なのです。

#### 4. 平穏な、時こそほめるチャンスなり

A子さんの母親は、あれこれ説教することを止めて、A子さんの話を聞くようにしたようでした。お父さんは、昼間のんびり過ごすために、夜のゲームを1時までにするよう言うてくれたようです。A子さんは夏休みに友だちと遊べたことをきっかけに保健室に顔を出すようになり、教室にも少しづ

つ入れるようになりました。まだまだ教室の雰囲気過敏で不安が高そうですが、周りは少しほっとしました。2週間ぐらい何事もなく時々登校、早退、欠席が続いた後、担任は母親に電話をしました。「A子さん頑張ってますね、お母さんのおかげだと思います。家でどんな風に関わってらっしゃるのか教えていただきたいと思って」。母親は、「そんなことはないです」と言いながら、少し嬉しそうに話してくれ、担任は「お父さんにもよろしくお伝えください」と電話を終えました。

ある程度問題が収まると、誰も何も言わなくなります。言い換えると、問題に関わるコミュニケーションは発生頻度が高いのですが、問題がないことを認めるコミュニケーションは発生しにくいのです。でも、このような時こそ保護者を嫌味なく褒めたり、認めたり、肯定したりするチャンスです。保護者が当たり前だと感じている些細な関わりを、肯定的に認めきちんと伝えることは、関係づくりにおいて欠かせません。教室でも同じです。例えば担任の先生に、「子どもが問題を起こしていない時に褒めて欲しい」とお願いすると、「それってけっこう難しい」と言われます。問題が起こった時や何かを達成できた時ではなく、本人が気づいていない何気ない日々の営みを認めて伝えることは、子どもとの関係作りには欠かせないものだと思います。

## 5. 持ち味を、知って生かすが基本かな

このケースでは、若い女性担任がご両親と会った時に丁寧に話を聞いており、その後頻繁に来談していたお母さんの話もきちんと聞いていました。担任は、この家族にとって有能な長女役を果たしていたようです。家族には「役割」があるのです。

家族と付き合うには、自分が家族との関係においてどのような立ち位置だと入りやすいのかと考えることが大切です。それは性格と呼ばれるものではなく、対人関係の作り方の傾向のようなものです。例えば、わたしは年配なので、両親と話していると頼れるおばあちゃんみたいになることがあるのですが、おばあちゃんと話すときには親しい娘のような立ち位置になることがあります。お母さんの友達のような関係を作るのが得意な担任もいるし、お父さんと男同士の相談仲間になるのが得意な担任もいます。要は、人とは違う、自分らしさを生かした関わり方を見つけていくことがコツになるので、それを教員同士でお互いに発見しあっていくことが一番だと思います。

以上、5つのポイントをあげてみました。もちろん、これだけで家族と上手く付き合えるようになるわけではありません。あの手この手で訴えてくる家族も、理由をつけて来談されない家族もあると思います。教員の思いだ

けで上手くいくとは限らず、冷静に駆け引きしなければならない時もあります。

冒頭で述べたように、今後家族はますます多様になっていくでしょう。一方で、教員にも持ち味という多様性が認められる必要があると思います。こうあるべきだというスタンスに頼っているだけでは、社会のニーズに合った対応に追いつけません。家族×教員は、どちらも多様であるがゆえに、無限の積を生み出すことができます。教員自身が、家族にも、そして自分自身にも多様性を見出し、積極的に活用していくことが大切だと思います。

### プロフィール

**赤津 玲子**  
(あかつ れいこ)

1965年福島県いわき市生まれ。龍谷大学文学部准教授。臨床心理士、公認心理師、博士(教育学)。カウンセリングルームこなん、神戸ファミリールームの非常勤カウンセラー、スクールカウンセラーとして、家族を視野に含めたカウンセリングを行っている。

著書に、『逆転の家族面接』(分担執筆、日本評論社、2017年)、『システムズアプローチによるスクールカウンセリング』(編著、金剛出版、2019年)、『みんなのシステム論』(編著、日本評論社、2019年)など。